

II-1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥・藤原地域では1999年度に22件の発掘調査・立会調査を行った。以下主要な調査を概観する。

藤原宮関係の調査は5件。内裏地区の調査(第100次)は、昭和14年度に日本古文化研究所が調査を行った朝堂院北面回廊と東面回廊の交点部分と、当研究所が昭和45年に確認した内裏外郭内の大規模な礎石建物とを連結する形で調査区を設定した。調査によって、礎石建物が桁行7間もしくは9間の大型四面廂付建物であることを確認。建物の性格や殿舎名の比定が、今後の検討課題となった。また先行条坊の四条大路と東一坊々間路に新旧二時期の変遷が認められ、宮中枢部の造営過程に関する重要な知見を得ることができた。

西北官衙地区の調査(第102次)では、7世紀後半から藤原宮期にかけての3時期の建物群を検出し、これまで様相が不明であった西北官衙域の土地利用状況の一端を明らかにすることができた。

藤原京の調査は6件。右京八条一坊東北坪・西北坪(第101次)の調査では、七条一坊西南坪の邸宅に関連する建物群が、七条大路を越えて西北坪に展開することを確認した。

飛鳥地域等の調査は11件。万葉ミュージアムの管理棟建設予定地の調査(第98次)では、東側谷筋の北東岸に営まれた工房跡の南限を確認し、工房群の東を限る掘立柱塀を検出した。また谷筋を横断する陸橋が等間隔で5条並ぶことを確認し、遺跡全体にわたって污水处理施設が完備された状況を明らかにした。また富本銭の鑄造に関わる廃棄物ブロックを検出し、富本銭の鑄型をはじめ、富本銭の鑄造技術や製作工程を解明できる多様な遺物を発見した。富本銭の出土総数も515点となった。飛鳥池遺跡の範囲確認調査として実施した第106次調査では、工房群が西側丘陵の斜面から南丘陵の裾部にかけて展開する

ことを明らかにした。工房は丘陵斜面を雛壇状に造成して配置されている。また西側を限る区画塀を確認したことにより、飛鳥池遺跡の工房群の広がりがほぼ明らかになった。

山田道の拡幅工事に伴う事前調査(第104次)は、奥山から山田にかけての丘陵中段で、方眼方位にのる大型掘立柱建物を検出した。丘陵部にかかる地点での藤原京の実態を知る上で注目される成果である。

水落遺跡の東南部で実施した第103次調査では、石組溝を伴う大規模な南北棟建物を検出し、9次調査の四面庇付き建物との位置関係から、水落遺跡が造営される以前に、石神遺跡西区画と同規模の長廊状建物とその正殿が存在する可能性が高まった。斉明6年の水落遺跡造営に伴って、北側へ移設された可能性があり、飛鳥寺西広場の変遷を考究する上で貴重な知見が得られた。奥山久米寺(第99-3次)の調査では、久米寺塔跡の南東約200mにあたる調査地で、8世紀後半の井戸と、掘立柱東西塀を検出。井戸からは「奥」と記された墨書土器が出土し、奥山廃寺周辺の土地利用に関する手がかりが得られた。

吉備池廃寺の調査(第105次)は、吉備池廃寺の第4年目の調査にあたる。今年度は、講堂・僧坊の確認と東面回廊の検出を調査目的とした。調査区内では講堂を確認できなかったが、伽藍中軸線上で僧坊を構成する掘立柱建物を発見し、伽藍の南北規模が160m以上あることが判明した。また東面回廊を検出し、回廊の東西規模が心々で約158mであることが確定した。この他、金堂基壇の東北隅を検出し、基壇掘込地業の周囲に造営時の排水溝が巡ることや、寺院創建に伴う整地の状況などが明らかになった。なお発掘調査に伴う現地説明会を以下の通り実施した。

(松村恵司/飛鳥藤原宮跡発掘調査部)

7月25日	飛鳥藤原第98次(飛鳥池遺跡)	花谷 浩
9月25日	飛鳥藤原第100次(大極殿院東方)	寺崎保広
3月11日	飛鳥藤原第105次(吉備池廃寺)	小池伸彦